

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520505

研究課題名(和文)言語の維持と変容についての総合的研究—スラヴ系少数言語の実証的分析をふまえて—

研究課題名(英文)Studies on Language Maintenance and Language Change

## 研究代表者

三谷 恵子(Mitani, Keiko)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：10229726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ブルゲンラント・クロアチア人、ソルブ人、ルシン人といった、中欧少数言語集団の言語と社会について考察した。これらの人々は長く異言語に囲まれながら、独自の言語と民族意識を維持してきた。本研究では、その要因として、宗教的帰属意識が重要であることを明らかにした。また彼らの言語について調査した結果(1)これらの言語には言語接触による変化が見られるが、その程度は、接触言語との社会的力関係、接触の時間的長さともコミュニケーションの強度に相関する、(2)接触の影響による変化は多岐にわたるが、これらはランダムに現れるのではなく、文法構造に関係すること、を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the languages and societies of the Slavic minorities in the central Europe, such as Burgenland Croats in Austria, Sorbs in Germany, and Rusyns in Serbia and Croatia. Those people have maintained their ethnic identity and the native language in the centuries of contact situation with the majority people surrounding them. This study revealed that for those minority groups the awareness of religious belonging is often crucial to keep their identity and language.

The study also examined how the effect of language contact emerges in the languages of the minorities, and revealed that (1) the features incorporated by the language contact are various, but the degree of contact-induced change are mostly correlated with the duration of the contact setting and the frequency of communication with the surrounding majority people; (2) the emergence of such features is not arbitrary, but apt to be in hierarchical order in relation to the grammatical structure.

研究分野：スラヴ語学

キーワード：社会言語学 少数言語 言語接触 ブルゲンラント・クロアチア語 ソルブ語 ルシン語

## 1. 研究開始当初の背景

欧州に多数存在する少数集団の言語については、すでに多くの研究が国内外でなされてきたが、とりわけ 1990 年代以後、欧州評議会により定められた『地域言語もしくは少数言語のための欧州憲章』がヨーロッパ各国において批准・実施されるようになってからは、少数言語の存在があらためて社会的に注目され、これとともに学術的にも研究対象として積極的に扱われるようになった。中・東欧圏においても、個別の少数言語を対象とした記述言語研究が着実に行われ、またこれと平行して言語とアイデンティティーや言語とその社会的機能の関係などを問う社会言語学的研究が活発に進められてきた。Palgrave Macmillan 社刊行の *Studies in Minority Languages and Communities* シリーズに含まれる Glyn Williams (2006) *Sustaining Language Diversity in Europe: Evidence from the Euromosaic Project*。あるいは Susanna Pertot et al. (2009) *Rights, Promotion and Integration Issues for Minority Languages in Europe*。などにあるように、ヨーロッパという地域論的枠組みで複数の少数言語を対象とした研究も現れた。このように、言語と社会の関係をダイナミックにとらえた研究が現れる一方で、言語をとりまく社会環境や、接触関係にある言語の力関係が言語の実態すなわち言語構造にどう反映されているか、社会環境が言語そのものをいかに変容させるか、またそうして形成された言語間にいかなる共通の特徴が見られるかといったことを、複数の言語を縦断的に観察しながら相互に関連づける実証的研究はまだあまりなされていなかった。

こうしたことから本研究では、中欧のスラヴ系少数民族である、ブルゲンラント・クロアチア人、ソルブ人、ルシン人の言語と社会を対象に、少数言語の維持と変容というテーマを設定してこれらの人々の言語の実態と、彼らを取りまく社会環境を調査し、これを相互比較し、そこにみられる共通性、相違性を明らかにすることとした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、(a) 少数言語の維持と変容の実態を記述する、(b) そこに言語外的すなわち社会的要因がいかに関与的であるかを明らかにする、(c) 複数の言語を対象とした(a)(b)の研究を比較することで言語維持と言語変容に関する類型的考察を行う、の三点にあった。

このうち(a)は記述言語学および歴史言語学の領域に属する問題であり、(b)はより社会言語学的視点に立脚した関心事である。(a)に関しては、言語構造の中に古い特徴がいかに保持されているか、また新しい変化がどの

ような形で起こり、それが言語全体をどう変容させているかを通時面と共時面の両方から考察することが主たる課題であった。ここにはまた、言語接触の影響がいかに及ぶかについての考察も必須なものとして含まれ、必然的に、接触言語研究における方法論上の問題を検討することも、課題の中にも含まれた。また(b)については、(a)で観察される言語特徴がどのような社会的条件下で形成されたのかを、当該言語の社会的機能や使用領域、他の言語集団と当該言語話者集団の交流あるいは支配関係などに留意しながら考察することが主たる課題となる。(a)と(b)は相互参照的に行われるものである。さらにそれぞれの言語を対象とした考察結果を比較し、共通点や相違点を明らかにして類型的検討を行うのが(c)に関する課題となった。ここでは(a)の検討課題に含まれる接触言語研究のさまざまな方法論の批判的適応とそこに見られる問題点の指摘、より有効な記述の枠組みの検討も課題とした。

## 3. 研究の方法

研究方法は

(1) 現地調査：本研究の研究対象であるブルゲンラント・クロアチア語が使用されているオーストリア東部のブルゲンラント州、セルビアおよびクロアチアのルシン人社会で調査を行い、またソルブ人から聞き取り調査を行う；

(2) 資料調査：ブルゲンラント・クロアチア語、ソルブ語で書かれたテキストの分析、また言語記述の方法を検討する；

(3) 言語状況の把握：三言語の使用環境、社会状況、客観的な言語データ（話者数、教育のレベル、言語使用態度など）の調査と分析を行う；

(4) 上記を総合して、少数言語の言語特徴と言語環境の関係を明らかにするという手順で行った。

## 4. 研究成果

本研究は、中欧のスラヴ系少数民族であるブルゲンラント・クロアチア人、ソルブ人、ルシン人の言語状況・言語実態と言語意識を、言語接触論や社会言語学の視点から分析した。その結果、以下のことを明らかにした。

### (1) 各言語の社会状況

ブルゲンラント・クロアチア人は、約 500 年前に現在のクロアチアおよびボスニア北西部から、今日のオーストリア東端一帯に移住し、以来、クロアチア語を維持してきた。しかし、第二次世界大戦後はドイツ語使用が優勢となり、また 60~70 年代にはドイツ語使用を推進しようという立場のブルゲンラント・クロアチア人側からのプロパガンダも

あり、その結果、この言語を日常的に使用する人口は大幅に減った。この傾向は現在も確実に進行中である。ブルゲンラント州では学校教育・社会政策・メディア活動など現地使用領域のすべてにおいて、少数言語政策が充実し、ドイツ語とのバイリンガル教育も実施されているが、現在この言語をアクティブに話す人は 16,000 人程度である。ただしその潮流の中で、若い世代の中には、積極的にこの言語を習得しようという者もいる。近年の傾向として、子供にはクロアチア（本国）の標準クロアチア語を学習させたいとする 30～40 代の親世代も現れている。これには、クロアチアの国際的ステータスの上昇、観光政策によるクロアチアのイメージ向上も寄与していることが推察される。

ソルブ人は、4～5 世紀のスラヴ民族移動期に現在のドイツ東部に移住した人々であり、その後のゲルマン化によってドイツ内少数民族となった。ソルブ語はザクセンの上ソルブとブランデンブルクの下ソルブに分かれ、このうちブランデンブルクの下ソルブ語は、プロイセンのドイツ化政策以後の歴史的経緯により、現在きわめて危機的状況にある。1990 年代末から開始されたソルブ語バイリンガル教育プロジェクト WITAJ によって、学校でソルブ語を学び、一定の言語運用力をもつ“話者”は 3000 人ほどに維持されているが、ブランデンブルク州では、実際に下ソルブ語を使用している家庭は 10 件ほどにまで衰退している。したがって、家庭での使用実態がほとんどない言語を、教室の外でどう活性化させ、今後の継承につなげていくかが深刻な課題である。

平成 26 年度には、ルシン語の社会状況の整理と言語調査を行った。ルシン語は、おそらく東スラヴ語起源だが、現在のウクライナからポーランド、スロヴァキア、ハンガリーにかけて分布したという地政学的分布から、西スラヴ諸方言、とくにスロヴァキア東部方言の影響を受けて形成されたスラヴ語である。現在はスロヴァキア東部、ポーランド南部などに分布する。東欧圏における話者の総計は 2 万人をやや超える程度と推定される。ウクライナのザカルパチア地方でもこの言語の一派が使用されているが、これはウクライナでは、ウクライナ語の方言と扱われている。本研究ではとくに、スロヴァキア東部から 18 世紀に、セルビア北部、現在のヴォイヴォディナに移住したルシン人のルシン語を扱った。

ヴォイヴォディナのルシン人は、もともとハプスブルグ帝国ハンガリー領であったカルパチア山麓南西側、現在のスロヴァキア東部に居住していた。18 世紀半ばに、それまでオスマン領であったヴォイヴォディナをハ

プスブル帝国が獲得したことで、ルシン人のこの地への移住が行われた。ルシン人の移住は 1750 年から始まり、移住から 250 年以上たった今も、ルースキ・ケレストゥルを中心にいくつかのコミュニティでルシン語が使用されている。ヴォイヴォディナでの話者は 2001 年現在で 14,600 人程度と見積もられる。近年ではセルビア政府の援助による文化・出版活動も行われているが、若年層の話者は減少している。

またヴォイヴォディナに移住したルシン人の一部はさらに、クロアチア北部に移住し、セルビアとクロアチアの国境付近にもコミュニティを形成した。ユーゴ時代にはブコヴァールが文化活動の中心だったが、1991 年のユーゴ戦争で街が破壊され、住民が離散したことからルシン・コミュニティの文化活動も著しい損害を被った。近年ようやく住民が復帰し、クロアチア政府援助による活動再開の動きが見られるようになった。公的な学校教育は行われていないが、政府から 2014 年実績で年間約 20 万クーナ（約 355 万円）の援助を受け、ルシン語に関する文化・出版活動などが行われている。

中欧の少数言語社会全体を通じて、言語話者の減少という現実がある一方で、文化教育活動やインターネットを通じた情報発信など、外的な面での活性化という状況が見取れる。

なお 26 年度は、ルシン語社会の研究の過程で、ルシン人と言語的にもまた社会背景的にも近い、移住ウクライナ人についての調査にも着手した。ウクライナ人の問題は本課題研究には含まれていなかったが、ルシン人同様、東スラヴ語から南スラヴ語圏への移住という点で共通することから、オーストリア時代にボスニアに移住したウクライナ人の言語状況について調査を行った。彼らの総数は現在わずかに 3000 人程度で、ほとんどがスルブスカ共和国のパニャ・ルカ付近に集住している。彼らが移住後、二つの世界大戦とユーゴ紛争を体験し、その中で人口を減らしながらも地元の南スラヴ人に同化されず、ウクライナ人としてのアイデンティティとウクライナ語使用の実態を維持して今日に至った要因として、ギリシャ・カトリック教会への信仰があることを明らかにした。

## （2）言語特徴

ブルゲンラント・クロアチア語とソルブ語はどちらも長期間、ドイツ語との接触状況にあり、どちらの言語社会においても、現在の話者は、ドイツ語とのバイリンガル、場合によってはドイツ語の方が優位である。当然、両言語ともにドイツ語からの影響を示しているが、その程度は同等ではなく、明らかにソルブ語のほうがより強くドイツ語の影響

を受けている。たとえば、ドイツ語の冠詞位置に現れる指示代名詞は、ソルブ語ではかなり文法化しているが、いっぽうブルゲンラント・クロアチア語では、まだ文法化の段階には至っておらず、指示代名詞の機能を保持している。また語順においても、ソルブ語では、ドイツ語特有の語順をそのまま複製したような語順がしばしば使われるが、ブルゲンラント・クロアチア語では本来の語順が維持されることが多い。

本研究では、ブルゲンラント・クロアチア語の一派で、チェコ南部モラヴィア地方に移住したクロアチア人の言語を詳細に調査した。この言語は、移住クロアチア人が居住した住環境のために、チェコ語とドイツ語とクロアチア語の三言語使用という中で維持された。したがってこのクロアチア語には二つの接触言語の影響が見られる。しかし、その現れ方は同質ではなかった。すなわち語彙借用レベルでは、語彙語の借用と機能語の借用に違いが見られ、語彙語ではチェコ語もドイツ語も同等に影響を及ぼしているが、機能語では、チェコ語からの借用はあるもののドイツ語からの借用は見られなかった。また機能語でも前置詞や等位接続詞ではチェコ語からの借用が見られたが、従属接続詞ではクロアチア語固有の語彙が維持されていた。文法形式レベルでは、動詞現在形 1 人称語尾にチェコ語の形式が受容されていたものの、そのほかではクロアチア語の形式がそのまま維持されていた。この例から、言語接触においては語彙のほうが文法形式より借用されやすく、機能語のように文法形式に関わるものでは、より文法構造そのものに関与しない要素が借用されやすく、文法構造・文法範疇により関与するものが借用されにくい、という観察を得た。接触言語学では、借用の起こり方に予測性はないという主張から、文法構造との相関性があるという主張までさまざまな議論がなされてきたが、本研究の結果は、借用の起こり方は文法構造と一定の相関性があるという主張と概ね一致するものである。

このような、接触言語による影響度の違いを生み出した背景には、ソルブ語がすでに近代初期より上位言語であるドイツ語からの強い文化的影響化にあったこと、ブルゲンラント・クロアチア語では、ハンガリー王国内で比較的文化的圧力の少ない状況にあり、またクロアチア人が移住の当初から自分たちの文語と教会でのスラヴ典礼の伝統を持っていたこと、といった違いがあったと考えられる。ソルブ社会とくにブランデンブルクのソルブ地域は、近代ドイツ国家形成の中で、学校教育や教会でのドイツ語使用の義務化などを経た。またソルブ人が居住するラウジ

ッツの炭鉱開発によってドイツ語話者が大量に流入した、といった点も、ドイツ語からの強度の影響を被る大きな要因であったと考えられる。

ヴォイヴォディナのルシン人たちは、移住以前から、もともとの東スラヴ語由来の言語に東部スロヴァキア語方言を混交させた言葉を話していた。ここから、ヴォイヴォディナのルシン語について、20 世紀はじめには、ガリツィア（現在のウクライナ北西部）の民俗学者フニャチュク（Volodymyr Hnatjuk）と、チェコの言語学者パストゥルネク（František Pastřnek）の間で、この言語がウクライナ語系か、スロヴァキア語系かという論争が展開されるといったこともあった。ヴォイヴォディナ・ルシン語の文語形成には、19 世紀後半～20 世紀最初に活動したコステリニク（Havriji Kostel'nik）が 1923 年に刊行したルシン語文法が大きな役割を果たした。

1945 以後、ザカルパッチア地方がソ連邦ウクライナに併合され、ポーランド、チェコスロヴァキアがソ連圏に組み込まれたことで、カルパチア地方のルシン語の言語文化伝統は断絶され、当局の意向によってウクライナ語が公的に使用されるという時代が続いた。こうした状況に対し、ユーゴスラヴィアに組み込まれたヴォイヴォディナ・ルシン社会では、コステリニクの文語伝統を継承し、現地のルシン語をベースとした標準語を形成するに至った。

ヴォイヴォディナ・ルシン語では、アクセントは語末から 2 番目にあり、中舌狭母音は前舌狭母音と融合して /i/ になっている。また東スラヴ語に固有のいわゆる *polnoglasié*（母音重複）はなく（ex. brada, draha）、\*kv, \*gv の子音クラスタや、\*dl は保持されている：kvét, hvizda, midlo, sadlo。これらは西スラヴ語に共通する特徴である。

ヴォイヴォディナ・ルシン語は、移住前の西スラヴ語の影響に加え、セルビア語の影響を受けている。影響の表れは語彙語に最も現れるが、前置詞の借用など機能語の領域にも及んでいる。ただし音韻面では、東・西・南スラヴ語のどの言語にもない特徴をもつなど、独自の発展を見みせている面もある。典型的には、\*s, \*z, t, d が前舌母音の後で š, ž, c, dz に替わる：šestra, žem (zemlja), cixi (tiho), dzivka。

このように、ヴォイヴォディナ・ルシン語は、西・南各スラヴ語から接触による影響を受けながら固有の特徴を有している。これは、移住からの期間がブルゲンラント・クロアチア人に比べても 200 年ほど短いこと、ルシン人がギリシャ・カトリック教会の信者であり、その教会コミュニティが維持されたことが起因していると考えられる。

このように、本研究で対象とした中欧スラヴ系少数言語においては、いずれも周辺の接触言語からの影響を受けた変化が見られるが、その程度は、接触期間の長さ、周辺の支配的言語社会からの文化的圧力の強度などによって異なるという結論が得られた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

1. Keiko MITANI. 2015. Derviš i smrt in Japanese: Literary translation, Bosnia, Japan. *International Forum Bosnia* 68. (印刷中)  
(査読有) DOI:未定

2. Кэйко Митани. *Мимо* в глагольном образовании: Проблема разграничения префиксации и сложения в славянских языках. 『ロシア語研究』24号, 2014年, 39-53. (査読有) DOI:なし

3. 三谷恵子「境界を描く—ボスニア出身作家たちのボスニア像—」『ロシア・東欧研究』No.42. 2013年, 17-31. (査読無) DOI:未定

4. Keiko MITANI. 2013. Posuđivanje u jezičnom dodiru i struktura jezika: razmatranje na temelju podataka iz govora moravskih Hrvata. *Japanese Contribution to the XVI. International Slavic Congress Minsk*. Japan Society of Slavists. Hitotsubashi University, 10-46. (査読有) DOI:なし

5. 三谷恵子「「境界」と「媒体」—言語から見た中欧」『思想』岩波書店, 2012年4月号, 73-91. (査読無) DOI:なし

[学会発表](計2件)

1. 三谷恵子「ボスニアの境界性とボスニア人の祖国イメージ」ロシア東欧学会・JSSEES合同大会共通論題報告, 2013年10月5日, 津田塾大学小平キャンパス

2. Keiko MITANI. Posuđivanje u jezičnom dodiru i struktura jezika. Razmatranje na temelju podataka iz govora moravskih Hrvata. The XVth International Congress of Slavists. Minsk, August 20-27, 2013. August 23. ベラルーシ・ミンスク国立言語学大学

[図書](計0件)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

三谷恵子 (MITANI, Keiko)